

★佐藤秋雄さんを追悼する！

訃報を受け取った。

4月に『アイヌ・琉球』を贈呈され、以前の『日本農業の復権』も一緒に、読んだ感想を送ると電話した。民族問題は書き終えたが、農業問題を考え悩んでいた。

秋雄さんには大きな謝意と敬意の気持ちがある。

もう読んでもらえないが、最後まで、賛同も反対も率直に書き、追悼とする。

2020年6月19日 高原浩之

羽山太郎氏著「アイヌ・琉球」「日本農業の復権」を読んで 大谷美芳(2020.05~06)

第2次ブンドは、沖縄闘争や三里塚闘争を闘ったが、民族問題や農業問題に考えはなかった。本書はその総括である。しかし、その前に、第2次ブンドの小ブルジョア急進主義がどう総括されどう清算されたか、がある。

また、民族問題や農業問題から進んで、マルクス・レーニン主義をどう総括するか、もある。

第2次ブンドはもう半世紀も前であるが、20世紀の経験を21世紀の教訓とする、こういう総括は今でも重要だと思う。

(1)「偉大な努力」

「われわれは60年、70年を通して、どこまでも主観主義者であった。しかし、同時に、他人の痛み、他人の歴史、他人の文化を肉体を通じて知り得ることとなった。被差別部落を知り、心身障がい者の痛みを知り、何よりも在日朝鮮・韓国、中国や台湾の人々の歴史を知ることとなった。加えて、大日本帝国内植民地たるアイヌモシリとアイヌ、琉球・沖縄を知り得たことは、主観主義の反省なくしてはあり得なかったのではないか。原子力発電を問うこと、三里塚・芝山の農民に学ぶことも他人の痛みから学ぶことであった。とともに、資本主義的生産様式の発展・生産手段の発達を疑うこともまた、知ったのである。被差別、被抑圧に学ぶこと。『差別する論理・立場』の放棄とは、人々の感情や感性に学ぶことから始めなければならない。」(『農業』p79)

「1968年当時、農民や労働者の立場や、アイヌや琉球・沖縄、在日中国朝鮮などの存在をも念頭にしていたのであろうかと、反省しきりの今日この頃である。」(『民族』p312)

1970年代に崩壊、しかし80・90年代に「偉大な努力」、21世紀に入ると「3・11」を経て2015年反安保法闘争で人民闘争は復活。本書はその「偉大な努力」を教えてくれる。

私なりに分かっているつもりであった。

「今日の人民闘争は、その具体的な課題の一つ一つに、この半世紀の間の偉大な努力が存在していると思う。新左翼(党派と元党派に属した活動家と新世代の活動家の総体)が、良い『体質』=実力闘争・自己決定権を堅持し、悪い『体質』=小ブルジョア急進主義を清算し、人民大衆と結合した。民族・女性・部落など差別の問題や労働者階級『下層』の問題が大きかったと思う。社会主義革命の原動力はプロレタリア階級の階級闘争であり、それに依拠する。この総括が実践され、70年闘争の意義が受け継がれていると思う。」(『追想にあらず』p404) 本書で改めて教えられた。

(2)「過渡期世界論」に主観主義の根源

総括と清算は根源まで必要である。ブンド第7回大会の「過渡期世界論」は、ベトナム反戦闘争の強力な指導理論であった。しかし、主観主義と観念論が濃厚にあった。

革命の根拠を、ほぼ全て、歴史認識＝「帝国主義から社会主義への過渡期」に求めた。政治的上部構造を経済的土台から切り離し、資本主義の帝国主義段階の継続を分析しなかった。日本革命を、日本帝国主義の内在的矛盾、その一部が民族問題や農業問題だが、そこからではなく、ほぼ全て、国際主義＝「三ブロック階級闘争の結合」から展望した(極限が赤軍派の「世界武装プロレタリアート」「国際根拠地建設」に基づく武装蜂起・革命戦争方針)。

帝国主義を対外的な植民地主義と侵略に一面化し、ベトナム民族解放闘争と連帯する反戦闘争の延長上に、帝国主義打倒を展望した。全共闘運動に依拠し、沖縄闘争や三里塚闘争を闘ったが、しかし、民族問題や農業問題はもちろん、大学問題についても、闘争の根本にある日本帝国主義の内在的矛盾を分析することはなかった。

その問題に対して、民主主義的要求と社会主義的解決の方針を提起する指導はなかった。反戦闘争へ動員するしか方針がなかった。これでは真に人民闘争は組織できない。

(3)民族問題とマルクス・レーニン主義

「アイヌ民族は『日本人』と違う言葉と生活をする権利をもっている。…固有の民族語と習慣や風習に従って生活する権利である。…その権利をまずもって、われわれは承認するのでなければならない。…歴史的に形成された抑圧民族は被抑圧民族に対して不平等をも辞さずにその解放闘争を支持するものでなければならない。」(『民族』p33)

「先住民族としての固有の文化、固有の民族の権利の回復…。」(p70)

「われわれは『沖縄の解放』『沖縄の自立』『沖縄の自決』について、その内容を決定する立場にない。なぜなら沖縄の将来は『沖縄人、沖縄・琉球弧住民、民族』自身が決定すべきであると考えるからにほかならない。…われわれは、自決権・分離の自由を支持するものである。…われわれは、不平等をすすんで受け入れるところである。これこそが抑圧民族における階級的責務であり国際主義である。そうすることによって歴史的に、真に民族間の融合はかちとられるであろう。」(p158)

「『革命』の起こったロシアでも中国でも、それぞれの国内に数十もある被抑圧民族に対する支配と収奪は旧体制下と同様に継続され、現在でも…中国におけるチベット民族やウイグル民族に対する弾圧や虐殺など無慈悲に行われ…。」(p19)(北山峻氏の序文)

これは賛同する。

①自決権と先住権と社会的文化的権利

日本は多民族国家であり、大民族が少数民族、琉球とアイヌを支配し抑圧している。日本の(「抑圧民族の大和 or ヤマト民族の」と言うべきか)プロレタリア階級は、被抑圧民族、琉球とアイヌの、(1)民族自決権＝国家的に分離・独立する権利、(2)先住民族としての権利、(3)社会的文化的な民族的権利、などを承認し支持しなくてはならない。それなしには、実は日本帝国主義を打倒して自己を解放する社会主義革命もない。

被抑圧民族の解放は自己解放であり、その民族的権利を具体的にどのように行使するかは被抑圧民族自身が決定する。

抑圧民族のプロレタリア階級は不平等を感じても、それを受け入れる必要があり、それなしには民族間の実際的な平等と融合はない。

②民族問題でマルクス・レーニン主義は総括が必要

ロシアと中国は、封建的帝国主義、ツァーリ帝国と中華帝国の国境をそのまま受け継いだ。外国帝国主義、ドイツと日本の侵略に反対する民族闘争の中で、国内の民族的抑圧が隠蔽された。大民族(ロシア・漢)が、少数諸民族の自決権を有名無実化し(ロシア)、「独立・分裂」と批判し(中国)、支配と抑圧を継続した。

官僚主義で資本主義化し、その官僚制国家資本主義が大民族の民族主義と結合し、帝国主義化した。マルクス・レーニン主義は民族問題で破綻した。総括が必要である。

帝国主義は、階級社会を基礎とした大民族による少数民族の支配と抑圧である。奴隷制と封建制と資本主義を通して存在した(日本のアイヌと琉球に対する帝国主義は古代奴隷制と中世封建制で始まった)。現存する国境は、17~20世紀にブルジョア革命と植民地独立革命で形成されたが(日本では明治維新)、大民族が少数民族を圧迫し、その居住する土地を略奪し、混在と同化を強制し、民族固有の生活と文化を奪って成り立っている。

帝国主義と民族問題は複雑である。階級支配は差別主義と一体で、資本が労働者を搾取して自己増殖する資本蓄積は、経済外的強制に基づいて農民を収奪しプロレタリア化する原始蓄積と一体である。それは帝国主義の植民地主義ではさらに苛酷に実行される。

被抑圧民族の権利は、(1)自決権(現存の国境を変更)だけではなく、(2)先住権や(3)社会的文化的権利が必要である。ローザの「資本蓄積論」とフランクやアミンの「従属理論」、あるいはバウアーの「社会的文化的自治論」、これらを一定、受け入れなくてはならない。

※ここで訃報を受け取った。最後まで書き進む。(2020.05.28)

※(付記)人種差別反対闘争がアメリカで拡大し、ヨーロッパに波及している。プロレタリア階級の社会主義革命の課題は広く深い。(2020.06.19)

(4)農業問題とマルク、ス・レーニン主義

賛同する点とできない点がある。

①社会主義革命の労農同盟

「農民は農民で全く新しい『生産共同体』を形成…。…消費者団体と言わず、工場労働者、労働組合と連帯する道を模索…。」(『農業』p80)

「循環型農業…地域自給社会…生産者と消費者は緊張しつつ密接な相互浸透関係」(p172)
「循環型農業なり社会とは直截に自給のことである。有機農業の是非を問うのみではなく、循環型農業なり地域社会づくりの地域での話し合いを組織すること、その主体は生産者たる農民・労働者である。」(p174)

「農民は農民として、労働者は労働者としてともに誇りを共有する…。」(p190)

「農民は、消費者たる市民や労働者を組織する条件をもっている。」(p191)

「地域には地域の農業、農民には農民固有の権利がある。労働者が主で農民が従であるはずもない。解放されるべき同等の権利をもち、社会とは共同のものである。」(p209)

「労働者と農民は共に直接生産者として団結しなければならない。」(p249)

これは賛同する。

●農業の有機的・循環型再建

日本の農業は、戦後、農地改革(資本主導の封建制廃止=土地革命)で、資本主義の中における自作農の小規模経営=小商品生産として出発した。独占資本は農業を工業の犠牲にしてきた(工業製品の輸出と農業製品の輸入)。専業農家の大規模化と資本主義的経営は進展せず、兼

業農家化が進行した。農業は衰退し、食糧自給率は低下した。化学肥料や農薬を過度に押しつけられて、地力略奪型に変質し、自然環境保全力を奪われた。

これに対して、農民が闘争し、人民が支援する。TPP(環太平洋パートナーシップ協定)反対やTAG(日米物品貿易協定)反対など。(1)農業を守り再建し、食糧自給率を上げる。(2)有機・循環型農業を発展させ、自然環境を守る。これが現在の闘争だろう。

●産業を再編し自然と共生する

グローバリズムと金融資本主義。日本帝国主義は、工業を国外に拡散し、国内は工業的な空洞化、第三次産業化=サービス業化に向かっている。工業の世界的拡大は、地球の自然環境を破壊し、災害を拡大する。豪雨や原発事故や新型コロナ・ウイルス感染症など。

闘争は農業問題を超えるだろう。(1)都市と農村、農業と工業と第三次産業の関係を変え、産業を再編成する。(2)人間社会が自然と共生して地球環境を保全する。闘争の発展はこれを問い、これに答え、プロレタリア階級の社会主義革命の新しい内容になるだろう。

●労働者と農民の共闘と同盟

プロレタリア階級は、上層が資本主義の社会的支柱となり、正規と不正規の雇用差別が拡大し、格差と貧困が拡大し、大分裂している。それはすなわち社会の崩壊である。

現状、農業を守り再建する闘争で、労働者は「消費者」として農民に共闘している。兼業農家は半プロレタリアだが、賃労働は工業で従事し、農業を担う主力の専業農家は勤労者と所有者の両側面をもつ小ブルジョアである。有機的・循環型の農業再建が「新しい『生産共同体』」、協同組合経営で担われても、管理と運営で資本主義化する可能性はある。

どうすれば農業の協同組合経営は、対抗社会となり、社会主義を準備できるのか？「共に直接生産者として団結」する。労働者が「消費者」を超え、真に労働者として、農民の勤労者としての側面と結びつく。社会主義革命の労農同盟と、それに基づく農業の防衛と再建だろう。それには、プロレタリア階級は、(1)下層に依拠(生活できる正規雇用と賃金 or ベイシック・インカム)の要求 etc)して大分裂を克服し、階級的に統一する闘争、(2)産業を再編成し社会を再建する全人民的な闘争を闘わなければならないだろう。

②歴史と現実 ブルジョア革命と資本主義化を経ない社会主義革命はない

「世界革命は西ヨーロッパを中心とする工業国中心に、労働者中心に考えられていた。…ロシアにおける資本主義の発展とそこにおける農民の土地所有について…このザスーリッチへの手紙で…資本主義生産様式に基づく機械制大工業が生み出す墓掘人による収奪者の埋葬のみが社会主義を準備するとしてきた『資本論』では論述しきれない地域・社会・歴史、ないしは国家のあることを認めた…。このことは、歴史的事実として証明された。資本主義発達史的には遅れたロシア資本主義国で、次いで、中国、キューバ、ベトナムなどで、『マルクス・レーニン主義』を標榜した『社会主義国』が誕生した…。」(p203)

これは 20 世紀の歴史と 21 世紀の現実からして賛同できない。

●歴史 ロシアと中国・ベトナム

封建制に対するブルジョア革命に直面し、農民の要求は土地革命、地主の収奪と土地の分配であった。それを支持しないと、プロレタリア階級は農民と同盟できなかった。その土地革命は、実は、農業で、小商品生産と市場経済から資本主義を発生させ成長させる(必ずしも工業のような大規模経営ではない)。

だから、社会主義は、ブルジョア革命と資本主義化を経て実現される。封建制に存在した農村共同体から資本主義を経ないで実現されることはない。

だから、プロレタリア階級は二段階連続革命を追求した。農民全体と同盟して「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」(ロシアの「NEP」の実際はこれ)=人民民主主義独裁を樹立する。それをプロレタリア階級独裁へ転化して社会主義革命に前進する。

工業化・国有化。資本主義を統制する国家資本主義によって社会主義へ移行する。農業集団化。市場経済と資本主義による農民の階級分化に対応し、貧農=半プロレタリアと同盟して実行する。しかし、この社会主義革命は挫折した。

●マルクス・レーニン主義は農業問題で総括が必要

工業の管理と運営から官僚主義が登場し、官僚制国家資本主義化した。

革命はブルジョア革命終わった。農業集団化は、自然と直接的に関係する特殊性を無視した過度の大規模経営化があった。ソ連の農業集団化は農民を収奪し、工業に対する資本の原始蓄積に転化した。

中国やベトナムは、集団化を廃止し個人経営化し、市場経済の中で農民のプロレタリア化と工業の原始蓄積を達成した。農業は小規模経営で資本主義の中にある。

マルクス・レーニン主義は、農業問題でも破綻した。総括が必要である。今日のロシアと中国・ベトナムの社会主義革命は、現に存在する資本主義を基礎に実現するしかない。

●現実 グローバリズム

17・18世紀のイギリスとアメリカ・フランス、19世紀のドイツと日本、それに続き、20世紀も、アジアを中心に、まだ、ブルジョア革命と資本主義化の時代であった。

一方は中国やベトナム。ソ連に続く官僚制国家資本主義。他方は韓国・台湾やASEANの開発独裁=権威主義。ドイツと日本(専制君主制=ボナパルティズム)を受け継いだ、上からのなし崩し的な革命と国家をテコとした資本主義化(韓国や台湾は後に人民の民主化闘争が勝利)。

それでアメリカ帝国主義の新植民地主義から脱却した。この状況は、ソ連帝国主義の崩壊で中央アジアと東ヨーロッパに、さらにアフリカに拡大している。

グローバリズムは、上部構造は帝国主義の覇権主義、アメリカのそれ、そして中国のそれ(「一帯一路」)であるが、土台は「世界の資本主義化」=「資本主義の世界化」である。21世紀の現実で、資本主義を経ずに社会主義を実現する展望が立つ国は存在しない。

③マルクス・レーニン主義の歴史的立場と社会主義の「ルネサンス」

「…根本思想は『同等の価値』…という概念である。…具体的には『土の思想・大地の思想』『農的世界・農業の基本的価値』を土台として展開する…。17世紀以降の機械制大工業の発展と労働者と都市住民・市民を中心にして、農業・農民を副次的なものとして『書かれた歴史(理論)』に対する批判となる…。」(『農業』p19)

「…マルクスとエンゲルスは疑いもなく『進化論』『発達史観』『文明史観』にとらわれていた。その典型的な理論として社会主義を準備する二つの条件を挙げることができる。①資本主義的生産様式の発展。すなわち生産手段の発展は、社会主義を準備する…。②機械制大工業の発展とは、同時に、労働者を大量に生み出し、この賃銀奴隷たる労働者は、資本家の墓掘人である…。」(p26)

「…農業に対する工業の生産力を優位とみなす…資本主義の非資本主義・非工業部門に対する優位とみなす…すなわち『未開・野蛮』に対する文明の対置。こうして、農民に対する労働者の、帝国臣民に対して非植民地住民の！これは、人間に対する順位づけではないか。この順位づけこそ、ブルジョアイデオロギーたる『同化政策』…であったし、現にそうである。まさに『発達理論』とは、この同化論なのだ。」(p34)

総括が必要だが、これは行き過ぎた批判であると思う。

●20世紀とマルクス・レーニン主義

マルクス・レーニン主義は、1848年のドイツ革命以来、ロシア革命、中国とベトナムなど、ブルジョア革命を社会主義革命に発展させ転化するという、歴史的に特殊な実践でプロレタリア階級を指導した。

資本主義に対する直接的な批判と闘争、それに、ロシアと中国やベトナムで直面したのは、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」(「NEP」)と人民民主主義独裁を樹立した後であった。

資本主義に対して、生産手段の所有制では、批判し闘争したが、(1)民族問題、(2)農業問題、(3)官僚主義の問題などでは、反対に受容した。工業を国有化し農業の集団化したが、官僚制国家資本主義化し、革命はブルジョア革命に終わった。

20世紀は、「帝国主義と社会主義革命の時代」と言われた。しかし、社会主義革命の時代ではなかった。まだ、依然として、ブルジョア革命と資本主義化の時代であった。

マルクス・レーニン主義は、このような歴史性がある。資本主義の生産関係のある面(管理・運営 etc)を生産力と見て受容する生産力主義もあるだろう。封建制に対する資本主義の優位は正しいが、農業に対する工業の優位という誤りもあるだろう。

●21世紀と社会主義

しかし、マルクス・レーニン主義は、基本的で中心的な2つの論点で、プロレタリア階級の社会主義革命の正しい指導理論である。それを否定するのは行き過ぎだと思う。

世界資本主義という土台、アメリカと中国の覇権主義という上部構造、これはレーニンの帝国主義論の通り、と言える。(1)独占、(2)金融資本、(3)資本輸出、(4)国際独占資本による世界の経済的分割、(5)帝国主義国による世界の政治的分割、である。

金融資本主義は、世界システムの中で、中心を工業的に空洞化し第三次産業化し、工業生産を周辺へ拡散し、そこで発展させている。貧困を周辺から中心へ拡大し、労働者階級を人間が生存する限界まで突き落としている。格差を拡大し、富を資本家階級、それも極少数に集中している。工業による自然環境の破壊を、中心から周辺に拡散し、地球の限界まで進めている。レーニンが帝国主義を性格づけた寄生性と腐朽性の極である。

資本主義的取得と生産の社会化の矛盾とその発展がある(「1%対99%」)。資本主義の生産関係が人間と自然の両方から生産力を破壊している。この矛盾が社会主義革命を準備する。

第1論点は正しいと言える。21世紀は帝国主義と社会主義革命の時代になる。

プロレタリア階級は、工業と正規雇用に限定されず、第三次産業と農業にも、非正規雇用と失業者としても、存在する。大分裂している。どう統一しどう原動力とするか？

資本主義は「労働と所有の分離」、社会主義は「労働と所有の再結合」である。プロレタリア階級が、今度は生産手段を共同で所有して、自己を資本の搾取から解放する。しかし、現状は、社会主義のより発展した新しい内容を要求する。人間が労働し生産する新しい関係、農業と工業と第三次産業、および都市と農村の新しい関係、人間社会が地球自然と共生する新しい関係、これの創出である。社会主義の「ルネサンス」である。

それが、大分裂しているプロレタリア階級を統一し、その階級闘争を社会主義革命の原動力として組織する。その意味で第2論点も正しいと言える。(おわり) (2020.06.19)